

所属： スポーツ科学部 競技スポーツ学科

資格： 准教授

氏名： 田中 竹史

<p>研究課題名</p>	<p>ことばを通じてヒト科ヒト属の認知能力を探る</p>
<p>研究目的及び研究概要</p>	<p>1. 研究の背景 Mora et al. (2011)によると、地球上には真核生物が約874万種存在すると推計されている。それらの多様な生き物のうち、ヒト（ヒト科ヒト属）は唯一ことばの使用が可能な生物種であり、ことばはヒトという存在を際立って特徴づけている。たとえ進化の隣人であるチンパンジー（ヒト科パン属）のように、学習能力が高く様々な点でヒトに比肩しうる認知能力を持つ生物種であっても、音声言語であれ手話言語であれ言語の使用は不可能であり（松沢 2011）、どんなに優れたコンピュータであっても自然言語を理解することは（技術的に困難なのではなく）原理的に不可能である（Poibeau 2017; 酒井 2019; 瀬上 2018）。したがって、言語研究はヒトという生物種の特質を明らかにするのに最も有効な手段であるといえる。</p> <p>2. 研究の目的及び概要 これまで認知科学の分野では、幼児期の言語発達は、Crain & Lillo-Martin (1999)、Rizzi (2002) など盛んに研究がなされてきたが、本研究では前年度に引き続き英語母語話者の言語獲得の過程に注目しその発達を詳細に調査することにより、大人の持つ統語構造や意味構造とどのような点で類似しどのような点で異なるのかを探るべく、これにより、ヒトの認知的な発達に対する基礎的な理解、更にはヒトという生物種の性質の理解、の一端を提供することが可能となる。 取らむ課題は、(i) <i>wanna</i>-contractionの獲得、(ii) 動名詞や現在分詞の獲得などが挙げられる。これらをCHILDESからのデータ等を手掛かりとして幼児による獲得過程に関する調査を行う。あわせてその他ことばの獲得・習得に関わる基礎的な課題にも取り組んでゆく。</p>
<p>研究実績の概要</p>	<p>3. 得られた成果</p> <p>3.1. <i>Wanna</i>-contraction 一般に、<i>wanna</i>は<i>want to</i>の"informal"な文脈における音声的な表現形と見なされ（Huddleston & Pullum 2002; Quirk et al. 1985; Swan 2016）、両者は実質的に同一のものとして扱われることが多い（Krug 2000; Leech 2003, 2004）。 本研究では、CHILDESに基づき英語母語話者の幼児による獲得過程を観察しその発達パターンを提示する。更になぜそのようなパターンとなるのかをCinque (1999)、Nakajima (1996)、Rizzi (1997) などに端を返し近年進展著しい統語構造の地図計画という視点から検討を加え、<i>want to</i>と<i>wanna</i>の間には<i>formal</i>と<i>informal</i>というスタイルの差以上の違いがあり、その違いが当該項目の獲得パターンに反映されていると議論する。 本研究では<i>want to</i>と<i>wanna</i>という意思表現の獲得を一例として取り上げ、機能範疇を獲得して以降の幼児は既に大人と同様の豊かで精緻なIP領域の構造を備えていることを示すと同時に、言語獲得は単純な模倣や頻度、経験に基づく学習のみにより進むのではなく、内的資源が重要な役割を果たしていること一端を明らかにした。</p> <p>3.2. 動名詞・現在分詞の獲得 一般に伝統文法や学習文法において、動名詞、不定詞、分詞は準動詞という類を成すということが良く知られている。それゆえ、江川 (1991) や安藤 (2005) などのようにこれらの区別を認める立場が広く受け入れられている。しかしながら、Quirk et al. (1985) やSwan (2016) など動名詞と（現在）分詞との明確な区別を認めない立場も存在する。同様に、生成文法や認知文法など拠って立つ枠組みの違いにかかわらず、動名詞と（現在）分詞の区別に疑問を投げかける主張も根強く残っている（Huddleston & Pullum 2002; Hiraiwa 2011）。 本発表では、CHILDESからのデータを手掛かりとして、機能範疇が出現する三語文・多語文の段階にある幼児による動名詞の獲得過程を概観し、その獲得パターンを提示する。そして、なぜそのような獲得パターンとなるのかについてRoss (1973) やBerger (2017)、Lowe (2017, 2019) などの議論を参考に検討を加え、この発達段階にある幼児はすでに大人と同様の豊かな構造を備えており、その構造の性質と大人と同様には十分に成熟していない言語以外の認知能力の相互作用により当該項目の獲得パターンが生じることを明らかにした。</p> <p>3.3. 体育系学生の英語学修 本研究では、初年次の体育系学生における英語への意識や学力の現況を、これまでは考慮されていないキャリアという概念を導入しながら集計データを中心に検討を加え、英語科目のカリキュラム構築において、特にアウトプットであるSpeakingへの配慮やTOEIC対策を考慮する必要性がある点を見出した。</p> <p>4. 今後の課題 3.1.や3.2.で取り組んだ課題では主として統語構造に焦点を当て研究を進めたが、対応する（語彙）概念構造など意味部門から見た当該現象の性質も探る必要が認められる。</p> <p>5. 研究実績等 上記研究の成果については、日本大学英文学会、応用言語教育学会、『スポーツ科学研究』等で公表あるいは公表予定である。</p>